

小林さんの講演を 聞いた日に……

中山 治美
harumi nakayama

講演会当日、黒い帽子にきのことうさぎ?の絵がササーと描かれた黒の洋服、スケッチブックがよく似合う雰囲気で現れた小林路子さん。司会の方の紹介の後、いきなり、「好きな人と恋人の顔を30分続けて見ていたこと、おありますか?」1時間、ずっと見ていたら相手がどっか行ってしまうとか、自分が飽きてしまうとか……。きのことや変形菌をとっても好きでも、ずっと見ているのは難しいけれど、絵を描くとまた別なのです。」とお話を始めました。

実際は、目で見て手で筆をとるけれど、自分の頭の中を通して表現するわけで、見ている間に次々と新しい発見や気づきがあるとのこと。老化防止にもよいそうだ。

「きのことを描く愉しさは何ですか?」とよく尋ねられることに対しては、「一番好きなのは、野外に行って、たとえ雨であろうと風が吹いていようと、きのことを探して、そして見つけたきのことを描くこと。」だそうで、フィールドが一番楽しいのは、わたしと同じ様です。

きのことの自然な姿を正確に描くことは当然ですが、絵として魅力的に仕上げるには、その場でスケッチを決めてしまうことだそうです。後の仕上げは、きのことが住んでいる周りの木とか土、枯れ葉とかを持ち帰って、早くて2、3日、長いと1週間ほどかかるそうです。

「夜中、シーンと静まりかえった中で、時にはナメクジの食事の音を聞いたりしていると、人間が住んでいる世界とは別のところで、れっきとした生き物の世界がある。こちらが気づかないだけの広い生物の世界を感じながら、きのことならきのことを描いているんですが、きのことのある状態のある時間を、こちらが絵の上に描かせてもらっているという……それがすごく新しい時間でも年取った時間でも、その生き物にとってのもの。それに対して、こちらもそれ相応の時間をかけて仕上げていきます。」

小林さんにとっては、絵は生き物の時間を描いていくものだろう。それを楽しみながら、会話しながら……。世間一般の人に辛気くさいと言われ

ようが、気にすることはないのである。

「変形菌を描くには、乾燥標本を手に入れれば、部屋の中ででも出来るというもの、実体顕微鏡を覗きながら、生物としてきれいで、見る人に理解してもらえて、絵描きとしてこれはいい景色だなあという、もろもろの条件を考えると難しい。」

お話の様子で1997年末から1998年初めにかけて科学博物館で行われた変形菌企画展のポスターづくりが大変だったことがよく分かる。

実体顕微鏡で探しているうちに、小林さんは変形菌の世界の旅人になり、カンケラ(クリアリヤカケラ:骨だけのちゅうちんのような子実体をつくる変形菌)を妖精のランプのようだと思う。そして実際にカンケラの形をしたランプを作ってしまう。キヌガサタケの小さなランプも見せていただいた。

そして、「科学者の方は、ロマンを持って研究なさっている。生き物の事実、真実というものを追求する努力と情熱というのは、今の世の中で一番ロマンじゃないかと思うし、そういう気持ちがあってこそ、本当に地味な、こういうと萩原先生に失礼なんですが、あまり儲かるとは思えないような(場内大爆笑)研究でも続けられる。科学者は最高にロマンチックな方々だと、わたしは思っています。まあ、絵なんていうものは、そんなに大層なものではないんですけども、この変形菌のランプのように、ちょっと楽しいという角度から、この変形菌の世界に小さくても、皆さんの注目と光とを当てることが出来たら幸いと思います。」との言葉で講演は終わった。

講演会と前後して館内で開催中の企画展「草木の精・牧野富太郎への招待」を見た。彼の植物標本採集、植物図、研究のすごさ・すばらしさは、それぞれ楽しんでいただくとして、わたしはある写真の前で思わず立ち止まり、微笑んでしまった。富太郎は、当時の金で2千円の借金は、土佐出身の岩崎家(三菱財閥の創始者)の支援でかたをつけたものの、標本や蔵書などを収めるため大きな家を借りては家賃を払えずで引越しを繰り返し、再び大正初期に3万円もの借金を抱えてしまう。やむな

かく けい

く外国に貴重な標本を売ろうとしたことが朝日新聞に載り、神戸在住の資産家、池長猛の支援を受けることになった。神戸に研究拠点を移すために送られた蔵書5万冊と40万点余りの標本を前にした富太郎の若き日の写真と、再び東京に拠点を移し、神戸から戻された標本を前にした富太郎20年後の写真と「気になった我が子戻りし歓喜哉」の書の前である。標本は、今のようにダンボール箱に入っていることはなく、ただ束ねてあるだけなのでそのただならぬ量が一目瞭然なのである。なんとまあ……。

しかし笑い事ではない。ちょっと、きのこ・変形菌をかじっているわたしですら茶箱2個の標本をかかえている。資料も貯まってきた。ましてや数十年もの長い間、採集、調査、研究してこられた方々は標本や資料をどう保管をされているのであろうか。小林路子さんの話ではないが、この世界、お金儲けとはあまり縁のない世界である。ほとんどの研究者個人に委ねられてきていているのではないだろうか、熊楠は例外としても。

先人にとっては安心して標本があずけられ、整理され、いつでも見に、研究しにいかれる場所。若い研究者にとっても今までの成果が調べられ次につなげられる所、いってみれば標本の図書館みたいなものがあってもよいはずだ。

ここ千葉県には県立中央博物館があり、標本の冷凍保存もでき、最新の技術もある。が、北海道には博物館もないと聞いている。多くの府県でも自然史関係の博物館はおろか、資料館すらない。どの府県にも公立の大きな入れ物(建物)が欲しい。そこに貴重な資料を整理保管し、さらに研究をする人間も大勢いてくれたらなあ、と思ってしまった。

今、学校の花壇を自然のままの生態に作り変える運動、ビオ・トープが全国的に行われつつあるという。生物の面白さを発見することが子どもの中に戻ってくることも含めて、ぜひ実現して欲しいものである。

講演は1998年11月22日(日)、上野の国立科学博物館大講堂で日本変形菌研究会創立20周年記念行事の一つとして「きのこを描く」と題して行われた。



キノコラム

inocolumn

鹿がキノコを食う話

佐野 悅三

房総の麻綿高原にのふもとにお寺がある。有名な麻綿原のアジサイはこの寺の住職が植えたものである。10月のある時、キノコ採集の帰りにこの寺に立寄ったことがあった。ちょうど住職の奥様がいてしばらく雑談を交わした。鹿と猪が増え過ぎて田畠の作物を食い荒らるので地域の住民が大変な迷惑を被っている。鹿とともにヒルが増え、アジサイなどを手入れをしていると気を付けていても必ずヒルにやられるといった話であった。そこでヒルよけに甚大な効果を発揮する佐野リキッドスペリアの作り方と使い方を教えてあげたいへん感謝された。話の中で、鹿が人より先にキノコを食ってしまうのでキノコ狩りの人にも影響が及んでいると聞いた。鹿がキノコを食うと聞いてその時は半信半疑であった。

1998年の秋は気温の高い日が続いたが、11月に入りやっと気温も下がったので、ハタケシメジを探りに取つて置きの場所に友人と行った。あるある。予想通りハタケシメジがたくさん出ている。喜び勇んで近寄ってみると、様子がどうもおかしい。目に入るハタケシメジのは

とんどに傘がない。しかも、多くが根元から掘り起こされ、急な斜面にまき捨てられたように散らばっている。まるで我々が取りに来るのを予想して誰かが意地悪をしたようだ。木や草の陰になつたため取り残されたものを大切に採りながら考えた。広い面積が徹底して荒らされており、人がやつたにしてはおかしい。もし人がこのようなことをするには、かなりの人数でかなりの時間がかかるはずだ。そんなことをするメリットはない。たぶん動物だろう。猪だろうか鹿だろうか。ここまで考え、あの住職の奥さんの話を思い出した。どうか、鹿が食った跡なのか。鹿が食った跡と考えれば理解出来る。鹿の群れがハタケシメジのおいしい傘の部分だけ食べ、粘土質で滑りやすい斜面のため、すべるひづめできのこが搔き散らされたのだ。鹿の食い残しを探った帰り道、その場所の主のような存在で千葉菌の会員でもある大久保さんと偶然お会いした。彼の話では、鹿はハタケシメジの開ききった傘の部分だけを食べるそうである。